『鬼哭 ―KIKOKU―』

作 瀬多海人

■登場人物

鬼姫（16）

金原友一（20）

真山一道（20）

餓鬼丸

緑泥ヶ沼の鬼

○墓場・夜

暗く荒れ果てた墓場。

もう誰も参る者もいないのか、ある墓石は倒れ、あるものは苔蒸して、名すらわからない。

そんな墓場をぼんやりと、雲間から覗く満月だけが照らし出している。

わずかに聞こえていた虫の声が、突然止む。

静寂。

砂利を踏みしめるような足音が、ゆっくりと近づいてくる。

誰もいないはずの墓場の間を、ひたり、ひたりと続く足音。

少女――鬼姫（16）の姿である。

鬼姫は巫女装束を、帯ではなく荒縄で結んである。

虚ろな目でつぶやくように歌っている。

鬼姫「とおりゃんせー、とおりゃんせ、こーこはどーこの細道じゃ」

鬼姫の姿は闇の向こうに消えてゆく。

小さくなってゆく歌声が、闇の向こう側からいつまでも聞こえている。

○緑泥ヶ沼沼べり・夕

葦が生い茂っている。

あたりにはモヤが立ち込め、じめっとした空気が淀んでいる。

粘質の沼からは時折、ぷくりぷくりと小さな泡が立ち上っている。

と、かさりと葦の一角が動く。

葦はやがてはっきりと二つに割れ、ひょっこりと少年の顔がのぞく。

いかにもガキ大将といった風の少年は、十歳のころの金原友一。

後ろを振り返り、葦の向こう側に呼びかけるように、

友一「ほら、なんてこたぁないやろ」

友一の声に応えるように、震える声が返ってくる。

声「……もう帰ろうよう」

友一「誰のために来たと思っとう？」

いらだったように、友一が葦の向こう側にいる声の主の腕を引っ張る。

転がり出るように葦の間から出てきて、ぬかるんだ地面にべたりと手をついてしまう、真山一道。

同い年とは思えないくらい、一道の身体は友一より、一回り小柄だ。

一道「うへぇ……手が汚れちまったよー。地面がびちゃびちゃで気持ち悪いー」

友一「（苛立って）情けない声、出すなや。男やろ？」

一道「だってぇ……」

友一「先行くぞ」

先に立って歩き始める友一。

あわててあとを負う一道。

一道「ゆ、友ちゃん、待ってよー」

小走りに後を追いながら、必死で友一に話しかける一道。

一道「ね、ね……本当に行くん？」

ぴたっと立ち止まり、一道に顔を近づけんばかりに迫る友一。

一道「な、なん……？　そんな恐い顔して」

友一「誰のためにここまで来た思うとるん」

一道「……」

絞り出すように言葉を繋ぐ一道。

一道「じ、爺ちゃんが、緑泥ヶ沼（みどろがぬま）には近づいたらいけん、言うとったもん。あそこにはぬしが……沼鬼がいるゆうて……」

友一「だからや！　一道んトコのお爺のあげな話ばっか信じとっけ、お前はいつまで経っても、弱虫言われんや」

一道「だけんど……」

友一「また学校でイジメられてもいいんか？　都会っ子はさっさと東京に帰れ、言われてもいいんか？」

一道「いや……やけど。だけど……」

友一「なんや？」

一道「沼鬼に食われとうない」

友一、一道を馬鹿にしたような顔で、

友一「はあん？　もう平成やぞ？　いまだにお前、そんな非科学的な昔話なんぞ信じてんかよ？」

一道「だけど……」

大袈裟にため息をつくと、友一は沼べりのぬかるんだ道を、さっさと先に歩いてゆく。

一道は今にも泣き出しそうな声で、

一道「友ちゃん、待ってえ！　こんなとこ、置いてかれたら恐い」

無言で先に立って歩いてゆく友一。

そのあとをぬかるみに足を取られながら、ひょこひょこと不格好に後を追う一道。

友一の向かう先に小さなお堂が建っている。

友一「お堂やな」

一道「かなり古いみたいやけど……」

いつ建てられたものか、定かではないくらい古いが、きれいに手入れされ、花ま

で手向けられている。

一道「……花が供えられてる？」

その花に気づくと、友一は得意満面になる。

友一「ほうれ、誰も近づいたらいかん言われとうはずが、花がちゃーんと備えられてるわ。誰かが来たっちゅう証拠やろ」

友一が振り向くと、一道は引きつった笑みを浮かべている。

一道「……み、みたいやね」

友一「な？　恐がる必要ないやろ」

一道「……う、うん。でも爺ちゃんは……」

友一「どうせ沼は危ないからいうて、近づかんようにウソついてるんやて」

一道「そ、そう……やろか」

友一「そうに決まってるわ」

笑う友一に、安心したように一道も小さく笑う。

その瞬間、甲高いカラスの鳴き声が、あたりに響く。

一道「ひっ！」

あわてて友一の腕に抱きつく一道。

友一「ったくう、一道は臆病やなあ。カラスやろ、カ、ラ、ス」

一道「カ、カ……カラスか」

引きつった笑みを浮かべる一道。

友一「わかったら、さっさと離れ。いつまでも腕に捕まられてたら、気持ち悪いわ」

一道「……う、うん」

友一「さーて……お堂の中は……」

友一がお堂の中を覗きこむように、なにかを探し始める。

一道「ゆ、友ちゃん？　なにしてん？」

友一「このまま帰っても、クラスのだーれも緑泥ヶ沼に行ったなんて信用せんやろ？」

一道「……う、うん」

友一「そんじゃ、意味ないやろ。なんか証拠になるもん、持って帰らんと」

一道「で、でも……そんなことしたら、バチ当たるて……」

友一「大丈夫やて……（ゴソゴソと）おっ、これでええか」

友一は、お堂の中で転がっていた木切れを手に取る。そこにはなにやら、文字が書かれていたようだったが、すっかりかすれて判別できなくなっている。

友一「ほいっ！」

木切れを一道の方へと放り投げる友一。

一道「お、おわっ……僕？」

友一「ったりまえやろ、一道。お前が弱虫じゃないってトコ、見せるために来てるんやぞ」

一道「そ、そうやけど……」

友一「ったく、礼くらい言うてもらいたいわ」

一道「あ、ありがと……友ちゃん」

友一「（ニッと笑って）ま、しゃーないわな。昔っから、一道のことは放っておかれんもん」

友一の笑みに、一道も笑みを返す。

一道「うん。都会の小学校に転校してからも友ちゃんのことだけは、忘れんかったもん。だからまたこっちに戻って来れて僕……」

恥ずかしそうに微笑む友一。

友一「さーて、帰っか」

と、ランドセルを担ぎなおしたとき、先ほどのカラスが一声、そしてそれを合図にしたかのように周囲から、一斉にカラスたちの鳴き声が木霊する。

唖然とした表情で、空を見上げる友一と一道。その足は固まったように動かない。

あまりの音量に周辺の木々までもが、ざわざわと揺れ始めたとき、沼の中心でぼこりという音とともに、大きな泡が一つ破裂する。

一道「ひっ！」

友一「へ、変な音出すなや。な、なんてこたぁ、ない……なんてこたぁ」

そう言う友一の表情もひきつっている。

二人の目は泡が起こった、沼の中心に注がれている。

と、泡の起こったあたりから、粘質の沼の水をかきわけるようにして、〝何か“が岸へ向かって進んでくる。水面下を進む、その〝何か“に魂を吸い取られたかのように、動けない二人。

友一「……い、一道」

一道「な、なに……？」

友一「動けっか？」

一道「……うん」

友一「なら、逃げ」

一道「（意外そうな表情で）え？」

友一「逃げ、言うてんじゃ……」

一道「ゆ、友ちゃんは？」

友一「恥ずかしいけんど、あ……足、足が動かん……動かんよ」

友一の足ががくがくと震えている。

一道「嫌や。友ちゃん置いて」

友一「だって、俺……もう……」

ぬちゃっと粘質の嫌な音が足元ですする。

一道が恐る恐る目を、友一の足元にやると、ぬめっとした肌の腕が友一の足首をつかんでいる。

一道「……！」

友一「一道、逃げっ！」

友一の必死の叫び。

それに促されるようにして、一道は方向も見ずに駆け出していた。

一道「わーーーーーーーーーーっ!!」

一道の背後で、ごぼっという、何かが沼に引きずり込まれるような音が聞こえた。

と、同時に葬送行進曲のようにカラスたちの合唱が響いていた。

○病院・病室内・夕

夕暮れの薄暗い個室内。

カーテンがしっかりとひかれているために、日差しも入り込んでいない。

ベットには人工呼吸器をつけられた、金

原友一（２０）が眠っている。

そのかたわらで、心電図が規則正しいリズムを刻んでいる。

真山一道（２０）は、椅子に腰かけ、微動だにせずに友一を見つめている。

一道「なあ、友ちゃん……俺達、今年成人式なんやな……って、アレからもう十年経つんか」

だが、友一はまったく反応せず、眠ったまま。溜息をつく一道。

うつむいたままの一道は、やがて嗚咽を漏らし始める。

○緑泥ヶ沼沼べり・一道の回想

びっしょりと濡れた友一が、救急隊員の担架に乗せられて、運ばれてゆく。

それを囲むような大人たちの人垣の影に隠れるようにして、一道が恐る恐る覗いている。

一道の目の前を通る瞬間、担架にかぶさ

れた毛布がずれ、友一の顔が露になる。

目を閉じていたはずの友一の目が、ぎろりと開き、一道をにらみつける。その目は充血して、恐ろしいばかりにらんらんと光っていた。

一道「っ!?」

思わず息をのむ一道。

だが、次の瞬間にはもう気のせいであったかのように、友一の目は閉じられている。

やがて担架が通り過ぎてしまうが、一道はまるで魅入られたかのように、固まってしまっている。

周囲の大人たちが、不思議そうな目で、そんな一道を見ては、去ってゆく。

○通学路・朝・一道の回想

とぼとぼと頭を垂れて歩く一道。

近所のおばさんたちが、井戸端会話をしている。

通り過ぎ際、その声が一道の耳に入ってくる。

おばさん「ほら、金原さんちの友一君、まだ意識が戻らないんですって。お医者さんもこれはもう植物状態で……」

感情のない表情で、立ちすくんでいる一道。

それに気づいて、そそくさとその場を立ち去ってゆくおばさんたち。

一道「……」

〇教室内・朝・一道の回想

登校してきた一道が自分の机に鞄を置こうとする。

だが、あるべき場所に机がない。

視線を巡らすと、教室の隅にポツンと一道の机が離されてある。

感情を表に出さずに、机を引きずり、自分の席に戻ろうとする一道。

だが、そんな一道をクラスメートたちが

、

こそこそと盗み見ている。

一道がそちらを見ると、あわてて視線をそらし、教室を出て行ってしまう。

一道は机を元の位置に戻すのをやめ、教室のさらに隅へと引っ張ってゆくと、そこに座る。

やがて始業のチャイムが鳴り、生徒たちが教室に戻ってくる。

そして担任もまた入ってくるが、一道を一瞥しただけで、なにもなかったかのように視線をそらし、授業を始めようとする。

生徒も教師も誰も一同と目を合わせようともせずに、淡々と授業が進行してゆく。

まるで一道がそこにはいないかのように振る舞う担任と生徒たち。

その瞬間、一道の目には周囲のカラーの風景の中で、自分だけがモノクロに見える。やがてそのモノクロの風景は朽ちて

ゆく。

○病院・病室内・夕

回想から戻って。

うつむいたまま、なおも嗚咽を漏らしている一道。

一道「帰りたいよ……友ちゃん。友ちゃんを独りで置いてけぼりにして……そんな自分が嫌で……俺……あの日、自分を緑泥ヶ沼に置いたまま、逃げてきたんだよ、きっと。だから教室にいても、家にいても、本当の俺はあの沼にしかいないんだよ……」

薄暗い病室の中、ぼんやりと浮かび上がる心電図。

そして一道の嗚咽だけが、静かな病室の中で響いていた。

○さびしげな市街路・夜

しとしとと雨の降る市街路。

周囲にはまばらな住宅があるのみで、人

の往来もなく、わずかな街路灯のみが、余計に寂しさを醸し出している。

コンビニの袋を下げた一道が、とぼとぼと歩いている。

ひたひたと歩く一道の足音に合わせるように、その背後からもう一人の足音が続いてくる。

足を速める一道。

それとともに、後ろからついてくる足音も早くなる。駆け出す一道。

一道「はぁはぁはぁ……」

小路を曲がったところで、ようやく背後からの気配が消え、立ち止まる一道。肩で息をしながら、周囲を見回すが、誰もいない。

一道「気の……せい？」

○一道のアパート・外観・夜

古びた安アパート。

その中の二階の隅の電気がパッとつく。

○一道のアパート・室内・夜

台所で、ヤカンのお湯が沸騰して音を立てている。あわてて一道がやってきて、火を止める。

家財道具のほとんどない、古びた四畳半のアパート。あるのは小さなテーブルと、万年床、そして小さなテレビくらい。

そして締め切った部屋の中は、じめっとしている。

テーブルの上ではインスタントラーメンが、湯気を立てている。

一道「（ラーメンのフタを取りながら）……あちっ」

ラーメンをすすりながら、なにげなくテレビのニュースを見ている一道。

キャスター「それでは次のニュースです。昨夜未明、〇〇市三丁目の住宅街で発生した通り魔事件は依然として……」

ピシッという硬質の音が窓ガラスを叩く。

びくっとしながらも一道は、窓の方向を恐る恐る見る。

一道「……ひっ」

窓に少女――鬼姫が映っている。

鬼姫「十年か……随分と長い時間、身を潜めていたものよな。ひと思いに殺ればいいものを……もっとも、わらわの立場としては殺られても困るがのう」

一道「……」

座り込んだまま、後ずさる一道。

すると、背中に硬質の棒状のものの感触を覚え、止まる。

鬼姫「……匂うのう」

恐る恐る振り返ると、そこには匂いに顔をしかめた、鬼姫の姿が。そして一道の背中に当たっていたのは、彼女の刀だ。

一道「ひ、ひぃっ……通り魔っ!?」

あわてて反対側へと飛び退る一道。

鬼姫「通り魔……？」

けげんな表情で、テレビのニュースへと

目をやる鬼姫。

そして合点がいったように、うなずく。

鬼姫「ははん。通り魔とはアレのことか。じゃが、通り魔は普通、家の中まで入り込んでは来ぬよなあ、餓鬼丸よ」

鬼姫の持つ刀――餓鬼丸がわずかに震え、声を発する。

餓鬼丸「じゃのう、姫よ。こやつめ、なにや ら勘違いをしておるようじゃて。とはいえ……やることに、そうたいした違いはないがの。ほっほっほ」

鬼姫「（眉をしかめて）我らの業（わざ）を、あのような下賤な所業と一緒にされてはたまらぬぞ」

餓鬼丸「なあに、鬼どもにとっては、我らの業とて、そう変わらぬ理不尽なもの」

一道「お、鬼っ!?　ていうか、あんたたち何なんだよ、人の家にあがりこんで」

部屋の隅で縮こまっている一道に向かって、ニヤリと微笑む鬼姫。紅い唇が大き

く半月状に開くと、小さな牙がのぞく。

鬼姫「なぁに……痛みはほとんど感じぬ。むしろ斬られた者は心地よさすら感じるとも言うぞ」

餓鬼丸をすらりと抜き放つと、その紅い唇をゆっくりと刀身に這わせる鬼姫。

一道「ま……待てって……冗談だろ？　じょ……冗……」

鬼姫「冗談？　わらわはそのような人の戯れ事など興味はない。……すぐに冥途に送ってやる故、覚悟せい」

ゆっくりと鬼姫が餓鬼丸を振りかぶる。

今にも振り下ろされんとしたとき、思わず一道は頭を抱え、目をつぶる。

一瞬、一道の目の前で光が見える。

×

×

×

カチンという音とともに、餓鬼丸が鬼姫の腰の鞘に戻る。

一道は頭を抱えたまま、うずくまっている。

鬼姫「……ちっ、ハズレか。そこの人間」

一道「……」

鬼姫「聞こえておるのだろう？」

一道「……（震えている）」

餓鬼丸「姫が尋ねておろうが」

一道「……ひっ？　い、生きてる……？」

あわてて自分の体をまさぐる一道。すると、はらりと一道の服が破れたかと思うと、すぐにばらばらになってしまう。

上半身裸の一道。

一道「……ひ、ひぃっ、な、なんでっ？」

鬼姫「いちいち説明せねばならぬのか」

餓鬼丸「しょせん、鬼に魅入られる程度の惰弱な人間ゆえ、致し方あるまいよ」

鬼姫「衣服のみ切り裂いた。わらわにとっては児戯にも等しい技で、こうも驚かれるとはな。……かつてのもののふ共は、この程度では驚きもせなんだぞ」

餓鬼丸「時を経て、人は怠惰になり申した、
といったところかのう」
一道「……こ、こんなことして……やっぱり
、通り魔……」
鬼姫（呆れた風に）まだ言うておる」
一道「……なら、そんな物騒なもん、なんで
振り回してるんだよ」
鬼姫「これか？」
ポンと餓鬼丸を叩きつつ、
鬼姫「餓鬼丸は縁（えにし）を斬る刀よ」
一道「えに……し？」
鬼姫「こやつは、日の本の国の言葉を理解す
らできぬのか？」
餓鬼丸「惰弱、惰弱、惰弱。これでは鬼にも
魅入られようて。……おかげで我ら、気の
休まる暇もありゃせぬわ」
鬼姫「それより……」
鬼姫の瞳が紅く輝く。
鬼姫「餓鬼丸、やはり……じゃのう」
餓鬼丸「やはり、じゃ」

一道「な、なにが……」

鬼姫「おのが身体の変化に気づかぬとは、どこまで愚かか。ほれ、見てみるがよい」

鬼姫が指で、一道の裸の上半身をなでると、ぬめっとした粘液がついてくる。

一道「……」

思わず顔をそむける一道。

鬼姫「おぬし、負い目があろう」

一道「な、なんですか……負い目って……」

鬼姫「なぜにこんな自分がのうのうと生きているのだろうか。自分よりももっと有意義に使える者がいるはず……この」

餓鬼丸の鞘で一道の胸をつく夜叉姫。

鬼姫「命を、とでも、思うておるのであろうが？」

一道「……」

夜叉姫「図星か」

一道「そう……なんで……俺がのうのうと、こうして生きていて、友ちゃんは一生ベットから起き上がることができないんだ……

神様は不条理だ」

鬼姫「ああ……神は不条理だとも。神は人の一生に興味を示しなどはせぬわ。ただ、そこにあるのみ、だ」

一道「あんたたちなんなんだよ……」

鬼姫「我らか？　ふふん……縁を斬る者よ。人が、特におぬしのような惰弱な者が、我らの世界と、つまらぬ縁を結んだりせぬように、な」

一道「縁を……斬る」

一道に背中を向ける鬼姫。

鬼姫「……では行くか。早う本体を見つけねばならん」

ハッとする一道。

一道「まさか、あんた！」

鬼姫「（背を向けたまま）ん？」

一道「友ちゃんを……」

鬼姫「それより先は聞かぬ方がよかろう」

一道「……斬る、のか？」

鬼姫「……」

一道「はっきり言ってくれ！」

夜叉姫「斬る」

一道「なんだよそれ……人を斬ろうっていうのに、そんな淡々と……」

鬼姫「おぬしがはっきり言えと申したのではないか。それに恐らく彼奴はすでに人ではない。鬼だ。あの世との縁を結んだときよりな」

一道「鬼なんかじゃない！　ちっさいころから、何かあったときはいっつもかばってくれて……友ちゃんは、そんな友ちゃんが鬼だって言うのか!?」

餓鬼丸「この小僧に、説教などしても始まらんわ。……行こう」

鬼姫「……そのようじゃ」

一歩踏み出した鬼姫に、一道の言葉が投げつけられる。

一道「お前こそ、鬼だ！」

鬼姫「そうじゃ。わらわは鬼じゃ。鬼であるからこそ、鬼を統べる者であるからこそ、

鬼との縁を斬ることができる。じゃが……」

振り返る鬼姫。そしてどこか哀しげに微笑みを浮かべる。

鬼姫「好んで、斬っているなどと思うな。貴様らが呼ばねば、そう……縁を結ぼうなどと思わねば、わらわとて……」

無表情の夜叉姫の双眸から、血の涙がほほを伝わって落ちる。

○病院・外観・夜

大きな満月が夜空に浮かんでいる。

その満月を背に病院屋上の手すりにこしかけている、鬼姫。

○病院・病室内・夜

友一の眠る個室内に、カーテンの隙間から柔らかな月明かりが差し込んでいる。

相変わらず、心電図が規則正しいリズムを刻んでいる。

すると、ピシッという硬質の音とともに、窓が勢いよく開き、カーテンが風にはた

めく。

それを合図にしたかのように、心電図がリズムを刻むのをやめ、ツーと一本調子の音だけが部屋の中に流れる。

と、友一がゆっくりと目を開ける。

友一「……来たかよ」

○病院・外観・夜

満月を背に、なおも鬼姫は手すりに腰かけている。その目は紅く、らんらんと光っている。

鬼姫「（遠くに呼びかけるように）ああ、参ったとも。ちと遅くなったがな」

○病院・病室内・夜

ベットの上で天井をじっと見つめている友一。その口元は楽しげに歪んでいる。

友一「ああ、そうだ。遅かったじゃねえか。……姫様よ」

○病院・外観・夜

手すりに腰かけたまま、鬼姫はニヤリと微笑む。

鬼姫「このようなところに身を潜ませておられてはなあ。わらわの鬼の目とて、万能ではない故のう。……なぜ、早々にあの者の魂を食らわなんだ」

○病院・病室内・夜

鬼姫の言葉にニマーッと嬉しそうに微笑む友一。開いた口からは粘質の涎が滴り落ちている。

友一「思い切り食らいたかったさあ。だが、あまり派手にやったら、次の縁を探さなきゃならん。姫様に見つかってしまうからなあ……まあ、さすがにこの一週間ばかりは我慢しきれなかったんで、ついつまみ食いをしちまったが……しくじったねえ」

○病院・外観・夜

吐き捨てるように、鬼姫はつぶやく。

鬼姫「次の縁を探す手間を惜しんで、か。鬼もまた怠惰になったものよ。……せめて、人であった頃の、あの者との縁……それを大切にしたかった、まだ人でありたかった……とでも言うてくれれば、わらわの刃も鈍るかもしれぬものを」

○病院・病室内・夜

呼吸器をはずし、ゆらりとベットから立ち上がる友一。その目はどんよりと沼の底のように濁っている。

友一は天井に向かって、嘲笑う。

友一「刃が鈍るだぁ？　鬼の中の鬼、鬼姫ともあろうものがどうした。永く生きている性格が丸くなったかしらーん？」

友一がそう嘲笑った瞬間、まるで空間が割れたかのように開き、友一の左腕を両断する。

友一「ぶばぁ……っ……い、痛てぇ……痛てぇよう」

粘液状の血をまき散らしながら、病室内をのたうちまわる友一。

○病院・外観・夜

屋上の手すりの上に立っている鬼姫。

その手には餓鬼丸が抜かれている。

鬼姫「悪いのう。すこしばかり本気を出させてもらった。では……いざ、我らがいくさ場へ参らん！」

宙へと身を躍らせると、鬼姫は大きく餓鬼丸を横なぎに払う。

鬼姫「界！　斬！」

瞬間、この空間だけが切り離されたかのように、時が停止する。

×

×

×

中庭に降りるなり、鬼姫は病室を見上げ

、

呼びかける。

鬼姫「よもや、その程度の傷で息の根を止められはすまい。いざ、出ませい！」

病室にはまったく動く気配がない。

餓鬼丸「……まさかあの程度で？」

鬼姫「否。十年もの時をかけて、縁を結んだ者の魂をしゃぶり尽くそうという、したたかな鬼。易々と斬られるとは思えぬ」

足元から突然友一の声がする。

友一「御名答～！」

鬼姫の足元が突然沼地と化す。

沼地からぬっと飛び出してきた腕をかいくぐって、宙を舞う鬼姫。瞬間、餓鬼丸を振るうが、刃は宙を斬る。

友一「はずれ～。御自慢の刀も当たらなきゃ意味ないわなあ」

鬼姫「ふん。やはり姑息な奴よのう。金原友一……否、緑泥ヶ沼の沼鬼とでも呼んだ方がいいか？」

沼鬼「ほう、素性までようく調べてきてるね

え……さすがだよ」

金原友一の身体がどろどろと溶け、全身

を緑色の泥に覆われた沼鬼が現れる。

鬼姫「ようやく本体にお目にかかれたか。し

かし……やはり匂うの、貴様は」

沼鬼「くっくっく……それにしても、用意周

到だなあ、さすがに。戦なんぞするより、

ささと逃げ出そうと思ったが、てんで抜

け出せやしねえ」

鬼姫「当たり前じゃ。先ほどわらわが界を斬

った。すなわち、ここは人の住む世界とは

切り離されておる」

沼鬼「てことは、あんたをぶち殺さなきゃ、

この切り離された世界は、もとの世界には

戻れねえってことかい？」

鬼姫「ああ、そのとおりじゃ。じゃが、一つ

だけ間違っていることがあるのう」

沼鬼「……なに？」

鬼姫「おぬし風情が、わらわを〝ぶち殺す〟

など、できると思っていることじゃ」

沼鬼「なら、試してみるかっ！」

激昂するなり、口から粘液を鬼姫に向かって吐き出す沼鬼。

沼鬼「直撃だぁ！　もう動きは取れねえよう

な。あとはなぶり殺しさあ」

鬼姫「聞いておらなんだのか。……〝ぶち殺

す〟などできぬと言った」

粘液がドロリと地面に落ちると、そこに

は汚れてすらいない鬼姫の姿が。

狼狽し、一歩下がる沼鬼が、なにかにぶ

つかって、下がれない。

沼鬼「え？　……な、なんで」

沼鬼の狼狽ぶりに鬼姫はニヤリとする。

鬼姫「わらわの話は聞いておらなんだか？」

沼鬼「な、なにが……だ」

鬼姫「界を斬った、と申したであろう」

沼鬼「だから、なんだって……え？」

鬼姫「二度、だ」

沼鬼「二度……？」

鬼姫「理解できぬか。……一度目にこのあたり一帯を切り離した。そして……」

沼鬼「ま、まさか……」

鬼姫「ああ、貴様が姿を現した、あの瞬間じや。貴様の四方三尺の界を切り取った」

沼鬼「な、なん……」

鬼姫「もう動きは取れぬよな。さて……〝ぶち殺し“てくれようか」

沼鬼「……あ、あああああああ」

一メートル四方の見えない壁の中で、もだえ、脱出しようとする沼鬼。

鬼姫「現世（うつしよ）との縁、いま断ちて、虚世（うつつよ）へと還られませい！」

空間ごと、一刀両断する鬼姫。刃が沼鬼を袈裟斬りにすると、人型であった沼鬼の身体がどろりと崩れて、落ちてゆく。

そして、その場には、お堂で友一が発見した木切れが落ちている。

鬼姫「……これが現世との縁を結ぶ媒介となったか」

鬼姫が木切れを手に取ると、次の瞬間、

蒼い炎とともに燃え落ちる。

餓鬼丸「さて……きゃつのところに参ろうか、姫様」

鬼姫「きゃつ？」

餓鬼丸「あの小僧を放っておくのかね？　すぐそこまで来ておるようじゃが」

苦虫をかみつぶしたような鬼姫。

鬼姫「やはり人よりも、鬼を相手にしている方が楽よのう」

歩きだす鬼姫。

〇病院正面玄関前・夜

一道が言葉もなく、茫然と立ちすくんでいる。鬼姫の声がする。

鬼姫「なにを呆けておる」

空間がぐにゃりと歪んで、闇の中から鬼姫がゆっくりと歩いてくる。

一道「さっきから病院の中に入ろうと、何度も……何度も……」

鬼姫は表情のない顔で、まっすぐに一道を見つめている。

一道「……まさか」

鬼姫「斬った」

一道「……そんな……友ちゃん……」

鬼姫「あれはお前が『友ちゃん』などと呼ぶ存在ではない」

一道「黙れ！」

鬼姫「そうか、ならば黙ろう。……行くぞ」

一道に背中を向け、闇の中へと歩き出そうとする鬼姫。

一道「待て！」

鬼姫「（振り返って）面倒くさい奴じゃな」

一道「なぜ、俺を斬らない!?」

鬼姫「斬って欲しいのか？」

一道「お前は鬼を斬るのが仕事なんだろう!?なら、つまらない情けなんか迷惑だ！」

腕をまくり上げる一道。そこにはあの粘液状のものはもうない。

鬼姫「わらわの業は鬼との縁を斬ること。し

て、貴様はまだ完全にはきゃつとの縁が結ばれてはいなかった。だから斬らぬ。それだけのことだ。……人のようにつまらぬ情けなどでわらわの刃は左右されぬ」

再び歩き出す鬼姫。

泣き崩れる一道。

一道「そんな……俺ひとりだけ残されて、どうすればいいんだよ……もう友ちゃんはいないんだぞ。俺も友ちゃんのところに連れていってくれよ。俺も鬼にしてくれよ」

闇の中へと消えさる瞬間、鬼姫が足を止める。

鬼姫「（背を向けたまま）貴様のその過去の縁にばかり依る心が、沼鬼に魅入られたのじゃ。鬼や過去に縛られるな。人ならば、人であり続けたいとわずかでも願うなら、新たな人と縁を結ぶこともできよう。人は人同士縁を結べ……鬼などではなく、な……」

闇の中へと消えてゆく鬼姫。

あとには、うずくまって嗚咽をもらす一道の姿だけが残る。

○墓場・夜

暗く荒れ果てた墓場。墓場を雲間から覗く満月だけが照らし出している。

墓場の間を、ひたり、ひたりと鬼姫が歩いている。腰の餓鬼丸が愉快そうに、小刻みに揺れている。

餓鬼丸「姫が人に説教を垂れるとは、なかなか興味深い経験をさせてもろうたわ」

鬼姫はムッとした表情を一瞬浮かべる。

鬼姫「お前が放っておけないと言ったのじゃ。わらわはべつに……」

餓鬼丸「まあ、よろしかろう。人との縁はならぬ、これは我らが一族が掟」

鬼姫「……当たり前じゃ。我らは鬼じゃ」

餓鬼丸「姫も人の世に参って長くなり申したからのう……いや、人並に情などが芽生えたのかと。一瞬寂しそうに……」

笑みを浮かべ、餓鬼丸の柄頭をポンと叩く鬼姫。

鬼姫「……戯れ言を」

餓鬼丸「戯れ言で済めばよろしいのじゃが」

鬼姫「……わかっておる。我らはただ、鬼と人との縁を絶つその刃なり、であろう？」

餓鬼丸「ようおわかりで。ただの刃、それ以上でもそれ以下でもござらんよ」

餓鬼丸の笑い声と、いつしか聞こえてくる鬼姫の歌声がかぶってゆく。

鬼姫「往きはよいよい、帰りは恐い……」

鬼姫の姿が闇の向こうに消えてゆく。

だが、歌声だけは、闇の向こう側から小さく、いつまでも聞こえている。

（了）